

2016年6月
4日 13~18時
5日 9~16時

20世紀日本
ファッション
産業の
仲介者たち

糸・布・衣の循環史研究会

科研費補助金・基盤研究B

「18~20世紀の

糸・布・衣の廉価化をめぐる世界史」

政治経済学・経済史学会

「糸・布・衣の循環史」フォーラム

「デジタル・アーカイブ手法を用いた
近代染織資料の整理と活用」

立命館大学

アート・リサーチセンター

文部科学省共同利用

共同研究拠点

「日本文化資源

デジタル・アーカイブ研究拠点」

立命館大学
アート・リサーチ
センター

趣旨

この研究ワークショップは、20 世紀の日本におけるファッション産業の生産流通組織とその構造転換を、「仲介者」を軸に、包括的に論じることを目的とする。最初に基調講演として、阿部武司先生に、綿業を中心とした大きな構造転換を位置付けていただく。続いて、第一部は、アフリカプリント、すなわち 19 世紀末から 20 世紀に東西アフリカに輸出されたプリント織物をテーマに、具体的な生産流通組織の構造を明らかにする。また、競合・模倣相手オランダとの緊張をはらんだ関係を軸に、国際的な視野から日本ファッション産業の仲介者を抽出することも目標としたい。第二部は、20 世紀前半からの、世界的な絹の大衆化の動きを注目する。アメリカ、日本それぞれのファッション消費において、日本の流通者の果たした役割を、絹の輸出入業者やデパートに注目し、検討する。あわせて、この時期により高級化されていった「友禅」の生産流通組織についても考察する。最後にファッション産業興隆期に、デパートが果たしうる役割について、フランスとの比較をいれながら考察する。

仲介者として、前半では、日本側の商社、後半ではデパートを強く意識するが、生産・再生産側の仲介者、在外輸出入業者、そして、デザインの模倣／真正をファシリテートする組織など、様々な仲介者を取り上げる。

ほとんどの発表が、生産と流通を合わせて扱う。また、糸から衣まで、そして絹・綿・合繊などの素材を橋渡しすることで、包括的に組織構造を取り上げることを目指す。地域面ではオランダ、アメリカ合衆国、フランスをはじめ、国内を超えて国際比較や連関を論じる。

連絡先

鈴木桂子（立命館大学）

suzukik@fc.ritsumei.ac.jp

井上直子（城西大学）、杉浦未樹（法政大学）

info@lccg.tokyo

msugiura@hosei.ac.jp

2016年6月4日 13～18時

- 13:00 - 13:10 開会あいさつ 井上直子（城西大学）・鈴木桂子（立命館大学）
13:10 - 14:10 基調講演 阿部武司（国士舘大学）
「日本繊維産業の構造変化」

第1部 アフリカプリント生産の仲介をめぐって

- 14:10 - 14:15 第1部趣旨説明 杉浦未樹（法政大学）
14:15 - 15:00 上田文（京都工芸繊維大学美術工芸資料館）
「京都のアフリカプリント生産と西澤株式会社」
15:00 - 15:45 堀辺学正（大阪芸術大学大学院）
「オランダにおけるアフリカプリントの生産と流通：Vlisco社を事例に」
15:45 - 15:55 休憩
15:55 - 16:40 杉浦未樹（法政大学）
「オランダは日本のアフリカプリント生産をどう見たか
：Vlisco (Van Vlissingen)社の1960年の調査報告書から」
16:40 - 17:25 正路佐知子（福岡市美術館）
「日本製アフリカプリントおよびカンガのデザインと流通
：Vlisco社アーカイブ調査から」
17:25 - 18:00 基調講演・第1部についての全体討論

1日目終了後、懇親会を予定

2016年6月5日 9～16時

第2部 絹の大衆化・高級化における仲介者

- 9:00 - 9:05 第2部趣旨説明 井上直子（城西大学）
- 9:05 - 9:50 松浦利隆（群馬県立女子大学）
「20世紀米国女性ファッションの変化と日本の生糸産業」
- 9:50 - 10:35 山本真紗子（立命館大学）
「京都友禅の生産流通構造：立命館大学京友禅プロジェクトの調査から」
- 10:35 - 10:50 休憩
- 10:50 - 11:35 井上直子（城西大学）
「日本絹糸紡績業の興隆と絹の大衆化：官営工場から三越へ」
- 11:35 - 12:20 山内雄気（同志社大学）
「銘仙の流行と商人」
- 12:20 - 13:30 昼休憩
- 13:30 - 14:15 安城寿子（文化学園大学，上田安子服飾専門学校ほか）
「斎藤佳三という異端：「流行考査所」設立に至るまで」
- 14:15 - 15:00 角田奈歩（法政大学）
「流行品の製造・小売とモードの創造・発信：18～19世紀パリの服飾関連業と百貨店」
- 15:00 - 16:00 全体討論

コメンテーター

鈴木桂子（立命館大学），青木美保子（京都女子大学）

司会

竹田泉（成城大学），杉浦未樹（法政大学）

1 はじめに—日本の工業化と繊維産業—

繊維産業が諸国の工業化のエンジンを果たしてきた事実はよく知られているが、日本の場合、繊維の中でも絹と綿がその役割を果たした。そのうち絹業は、幕末の開港以降、生糸輸出を中心に伸びていったものの、①第一次世界大戦期以降における人絹による織物市場の蚕食、②織物用に代わる女性用ストッキング用の糸市場の世界恐慌による収縮、③Du Pont社によるナイロンの工業化、④戦時中における桑畑の米作用田畑への転換などにより、とくに1930年代以降、壊滅的打撃を受けた。他方で綿業は、1937年の日中戦争勃発以降約10年間、衰退を余儀なくされたものの、それ以前の戦間期には世界市場でランカシャー綿業を凌ぐほどの黄金時代を享受し、また、1950年代には重要産業の地位を取り戻した。

以上は拙稿「日本の経済発展と繊維産業—綿業を中心に」『繊維機械学会誌』第68巻9号（2015年9月）の要約であるが、今回の報告では引き続き、戦時期以降、今日までの日本繊維産業の変化の概要を把握してみたい。

2 戦時および戦後の統制経済の影響

原料綿花を全面的にインドやアメリカからの輸入に依存し、その金額が日本の輸入総額の約30%にも及んでいた日本綿業は、日中戦争勃発直後から外貨節約のため原綿輸入を減らされてから次第に「不要不急産業」と言われるようになり、1940年以降企業整備が強行され、例えば、戦前に60-70も存在した綿紡績企業は「十大紡」に集約された。敗戦後、繊維産業は、占領軍の意向も与って「平和産業」として復興することになったが、製糸業は昔の勢いをまったく取り戻せなかった。綿業でも設備・原綿・電力・労働の全てが足りず、復興は容易ではなかった。

このように天然繊維に関して統制経済はマイナスに作用した面が大きいが、いくつかの新しい動きが戦時下で現れつつあったことは重要。（1）軍服やパラシュートを縫うために広島県備後地方などでは縫製業が、軍被服廠の指導を受けて飛躍的に発展した。敗戦後の岐阜でも満洲ハルビンからの引揚者により婦人服生産が始まった。いずれものちのアパレル産業の拠点となった。（2）第一次大戦期から人絹長繊維（レーヨン）が商社や綿紡績企業によって製造されていたが、戦時期には日東紡をはじめとする人絹メーカーによる人絹短繊維（スフ）の重要度が増した。（4）1938年におけるナイロンの工業化の衝撃から、合成繊維製造が京都帝国大学桜田一郎研究室、東洋レーヨン・鐘紡・東洋紡などで合成繊維製造の研究が旺盛に進められるようになり、高度経済成長期に開花する合繊製造の基盤が形成された。

3 朝鮮戦争ブーム以降、高度経済成長期までの繊維産業の変貌

- （1）多くの産業が復興した朝鮮戦争ブーム期に、綿業は一年間は空前の繁栄を見たものの、ほどなく石炭産業と並んで他産業の発展をよそに過剰設備、過剰人員を抱える成熟産業になる。高度成長期に大手綿紡績企業は人員削減をはじめリストラを緩慢に続けるようになった。
- （2）戦前の大手綿紡績にせよ中小機屋にせよ、最終製品はおおむね綿布どまりであった。戦間期

に、前出の広島県備後産地は農村向け労働着、岡山県の児島と井原は学生服、そして軍被服廠は軍服と、ミシンを用いた被服加工は確かに行われていたものの、日本人の日常の衣類としては和服がまだ圧倒的に多かったため、そうした「洋服」市場は狭隘であった。しかし、敗戦後には日本人の洋服着用、とくに女性の洋装が急速に増えていった。そして、当初ミシンによる内職で作られていた婦人服は、1960年代半ば以降には既製服に代わっていった。1960年代半ばにおけるアパレル産業の定着は、日本繊維産業の一大画期であった。その担い手は、上記の大手綿紡績や後述の化合繊維メーカーではなく、すでに述べた織物産地から派生した縫製業者と、大阪・東京などの大都市で成長した製造問屋とその傘下の中小零細企業であったとみられる。

- (3) このアパレル産業と大いに関連するのが、合成繊維製造の本格的発展であった。それへの参入企業は帝人、東レ、クラレ、日レなど戦前期に成長した旧人絹専門メーカーと大手綿紡績企業とに大別される。ナイロン、ポリエステル、アクリルなどの新素材はそれ自体で、さらに天然繊維と混ぜることによって、天然繊維にはない風合を生み出した。また、合繊は衣料品にとどまらず様々な産業素材を供給するようになったが、この点について今回は指摘にとどめる。
- (4) 問屋・商社・デパートという従来の流通機構に加えて高度経済成長期にはスーパーマーケットが登場するが、アンダーウェアをはじめとする日常用アパレル製品にはスーパーでの販売が重要な役割を果たした。

→以上を前掲、拙稿 p.535 (p.33) に示した 1930 年代前半における綿業のモデルと類似した 1980 年頃に関する図に取りまとめ、当日お目にかけておくっている。

4 石油危機から現在までの展望—繊維サプライ・チェーンの崩壊

石油危機以降、繊維産業の全体的不振は、石油化学製品でもある合繊のコストアップにより、それまで綿業の不振をカバーしてきた合繊産業にまで及ぶようになった。

ただし、高度経済成長を経て豊かになった日本人は国産アパレル製品を 1980 年代前半ごろまでは着用し続け、裕福な中高年の女性を主な顧客とした高級絹織物の需要もバブル以前には衰えなかった。

繊維産業が糸という川上から衣料品という川下の最終製品に至るまで競争力を失い、海外諸国からの輸入によって急速に衰退するようになったのは、急激な円高が進んだ 1985 年 9 月のプラザ合意以降のことであった。そして 20 世紀末にはのちにみる一部の大企業を除き、国内の中小規模の紡績、機屋、縫製業者などが次々と撤退していった結果、国内のサプライ・チェーンは歯抜け状態になってしまった。

しかしながら、企業レベルで見れば、東レは、かつてのライバル帝人の不振とは対照的に、ユニクロと組んでグローバルな生産を展開し、炭素繊維などの新素材の開発にも支えられて好調な業績を維持している。旧綿紡績 10 社中、呉羽紡は 1966 年に東洋紡との合併で消滅し、鐘紡は経営破綻により 2008 年に姿を消した。最近ではユニチカの経営不振も取りざたされているが、残る 7 社は健在であり、いずれも繊維にしがみつかない柔軟な事業を展開している。綿業よりも早く壊滅した製糸業でも片倉工業は、いずれも蚕糸業から派生した繊維、機械、医薬品の製造を続けている。グンゼはストッキング等のアパレル製造を持続している。また、前記のユニクロのほか、オーガニック・コットンをはじめ天然素材から糸を紡ぎ、高付加価値生産で生き延びている大正紡績、あるいはジーンズ製造で世界でも有名なカイハラなど、今後も生き延びていくことが予想される企業が存在することも指摘しておきたい。

第1部 アフリカプリント生産の仲介をめぐって

京都のアフリカプリント生産と西澤株式会社

上田文（京都工芸繊維大学美術工芸資料館）

本発表では、まず京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵の大同マルタコレクションを紹介する。このコレクションは京都にあった大同マルタ染工株式会社が貿易に有効なデザイン見本として収集したサンプルで、アフリカプリントに関する生地見本類が含まれる。この資料とあわせて、大阪に本社のあるアフリカ向け輸出商社の西澤株式会社での聞き取りインタビューをもとに、1960年代の日本のアフリカ向けプリント輸出の生産、販売について述べる。日本からアフリカへ、商社がどのようにして輸出していたのか、西澤株式会社を通じた事例を報告する。

国立民族学博物館「更紗今昔物語 ジャワから世界へ」2006

上田文「京都からアフリカへ 大同マルタコレクションにみる 1960年代京都の捺染産業 報告書」
京都工芸繊維大学文化遺産教育研究センター 2014

オランダにおけるアフリカプリントの生産と流通

Vlisco 社を事例に

堀辺学正（大阪芸術大学大学院）

本研究では、オランダの「アフリカプリント」製造業者である Vlisco 社の製品を研究対象として取り上げ、Vlisco 社がどのようにジャワ更紗を模倣し、アフリカ向けの製品づくりを行ってきたのかを考察する。また、その製品づくりの過程で仲介者となった商社の役割を導き出したい。

上岡学正、日本のプリント産業とインドネシア、アフリカ向けプリント更紗、「更紗今昔物語」展覧会
図録掲載分、国立民族学博物館、2006年

オランダは日本のアフリカプリント生産をどう見たか

Vlisco (Van Vlissingen)社の 1960年の調査報告書から

杉浦未樹（法政大学）

1960年、Vlisco 社重役は一週間日本を訪れ、西澤商会をはじめとした商社と大同マルタなどプリント会社の視察を行い、極秘調査報告書をまとめていた。この時期は、日蘭のアフリカプリント輸出が第二全盛期を迎える数年前である。報告書は Vlisco の内部資料であり、自社と比べて日本の諸企業の強みや弱みを列挙し、さらに日本との将来の関係性について競合・協同・補完の方向性がそれぞれ具体的に分析されている。発表では、この報告書の内容を発表しながら、1960年前後の日本のアフリカプリントの生産・流通の組織構造をとらえなおす提案を行う。

フリスコ社報告書翻訳抜粋

日本製アフリカプリントおよびカンガのデザインと流通

Vlisco 社アーカイブ調査から

正路佐知子（福岡市美術館）

発表者は今年初め、Vlisco 社アーカイブで日本製アフリカプリントの調査を行った。本発表では Vlisco 社に保管されていた 2 種のカンガ、およびアフリカプリントのサンプルを例に、デザインと流通の面から日本とオランダの関係について考察・紹介する。

日本製アフリカ向けプリント布のデザインソースをもとめて 日本とアフリカ、そしてオランダ

第 2 部 絹の大衆化・高級化における仲介者

20 世紀米国女性ファッションの変化と日本の生糸産業

松浦利隆（群馬県立女子大学）

19 世紀中頃に始まった日本の生糸輸出は、近代化に伴い短期間に世界市場に進出、20 世紀初頭には世界市場でイタリアや中国と競うようになった。19 世紀世界では、絹は主に西欧諸国で、富裕層の婦人用のドレスとして消費されてきた。

しかし 20 世紀に入ると、急速に経済力を増した米国では一般大衆が絹を身につけるようになり、同じ頃には女性ファッションに大きな変化が起こった。女性の社会進出も活発化し、衣料の簡素化、軽量化が進み、絹のような薄く柔らかくしなやかな繊維素材がますます必要になってきた。こういった中、日本は養蚕・製糸両面での重要な技術改良によって、安価で大量の生糸を生産できる体制を整え、大衆需要が発生した米国中心に輸出を拡大した。こうして高級繊維「絹」は 20 世紀には大衆化し、世界の服飾文化をさらに豊かにする大きな役割を果たした。

京都友禅の生産流通構造

立命館大学京友禅プロジェクトの調査から

山本真紗子（立命館大学）

京友禅の生産の現場では大正期ごろから「分業制」が確立したといわれる。これは長年京友禅の技術と量産体制を支えてきたが、現在はその維持が難しくなっている。立命館大学京友禅プロジェクトでは、実際に着物を発注し、その製造過程を調査することで、現在の京友禅の現場が抱える問題を明らかにした。本発表では、京友禅業界の現状を紹介し、分業制の再編成を試みる動きについて京友禅史や伝統産業史のなかでの位置付けを考えたい。

日本絹糸紡績業の興隆と絹の大衆化：官営工場から三越へ

井上直子（城西大学）

明治 10 年、内務省は、富岡製糸所(明治 5 年)につづいて、屑糸紡績の官営模範工場、新町屑糸紡績所を開業させた。

絹糸紡績の機械化や精練技術は、元タイギリス（ブラッドフォード）、あるいはフランス（リヨン）、スイス（ゲルサウ）の国境地域で 19 世紀以降、急速に発展を遂げ、その様子を視察した初代内務卿、大久保利通の指示により、日本への技術移転が実現した。

国策として振興を急いだ絹糸紡績業が、いかなるロジックで民間に払下げられ、日本における絹の大衆化の実現、銘仙という手の届くラグジュアリーの誕生に結びつくのか、主に明治 20、30 年代の三越、経営資料等から考察する。

銘仙の流行と商人

山内雄気（同志社大学）

野良着として利用されていた銘仙が、おしゃれな外出着へと変貌した。

そのような変化を先取りして、流行創出の仕組みを構築した商人がいた。

本報告では、銘仙を巡るマクロ文化的な言説の変化を紹介しつつ、新たに誕生した言説に基づいてビジネスを進めるための仕組みを構築する商人の様相を明らかにする。

Yuki Yamauchi, "Why was Meisen, Japan's traditional working clothe, accepted well in the market as everyday clothes and stylish garments between 1900 to 1930?", 『同志社商学』, 65-5, 2014, pp. 767-781. <https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/16294/017065050018.pdf>

山内雄気「絹の大衆化と昭和モダン：流行商品「銘仙」の誕生」（課程博士論文，一橋大学 2009 年）
要旨 http://www.cm.hit-u.ac.jp/phd/files/ronbun_2009_11.pdf

斎藤佳三という異端

「流行考査所」設立に至るまで

安城寿子（文化学園大学，上田安子服飾専門学校ほか）

斎藤佳三は、ドイツ表現主義の影響のもとに着物や帯の図案を考案し、大正後期から昭和初期にかけて、それらは白木屋で商品化された。しかし、斎藤は、百貨店主導の流行創出に飽きたらず、1940 年に、よりダイナミックな流行を生み出す独自のシステム構築の計画に着手する。戦争によって途中で挫折し、研究者の間でもほとんど（全く）知られていない斎藤の計画とはどのようなものだったのだろうか？

斎藤佳三「日本人の服装問題」『新小説』1918 年 3 月号，27-38 頁

流行品の製造・小売とモードの創造・発信

18～19 世紀パリの服飾関連業と百貨店

角田奈歩（法政大学）

17 世紀、フランスでは絶対王政確立と共にヴェルサイユ宮廷で一種の礼儀作法として「モード」が成立した。しかし 17 世紀末頃から「モード」という語は移ろい変わる気まぐれな好みを意味するようになり、その中心はパリという都市に移る。それと共にパリの服飾関係業は繁栄し、18 世紀半ばには「モード」を商品として作り売ることに特化した職業が成立する。19 世紀に入るとこれらの職業は近代的製造業・小売業として成長し、世紀半ばには百貨店とオート・クチュールが誕生することになる。

こうしたパリの服飾品製造・小売業は、「モード」を、どのようにして集約し、創造し、拡散したのか。モノとして、また現象としての「モード」が生み出され広められる中で百貨店やその前身などのパリの服飾関連業が果たした役割を検討する。

角田奈歩『パリの服飾品小売とモード商：1760-1830』（悠書館 2013 年）

「「モードの国」フランス」、杉本淑彦・竹中幸史編著『教養のフランス近現代史』（ミネルヴァ書房 2015 年 6 月）、第 5 章

「モード界の「ナポレオン」とオート・クチュールの起源」、徳井淑子・朝倉三枝・内村理奈・角田奈歩・新實五穂・原口碧『フランス・モード史への招待』（悠書館 2016 年）、第 I 部第 1 章「流行を商う」

「「モード都市」パリのファッション産業前史」、*Fashion Talks...*、3 号（2016 年 5 月発行予定）、12-21 頁